

注

だとして脇へと押しやる」とを、アレクサンドリアの図書館を焼き払うことになぜらへる。時間と言語とに対するそぞろつたテロリスト的な態度は、彼がつねに行なつてくる誘惑である。しかし、この雲の中の声は、沈黙の永遠性から抜け出して具体化へと踏み出す伝達を垣間見せてくれる。彼と魚とは、きっと自分たちが無限の極へと擦ねつけられるだろうと完全に予期しつゝ、お互いくち近付く。そのとき、彼ら自身が驚くことになるだらう。

(一)以ト引用は次の略記号によれ。

PC: *Practice in Christianity*, translated Howard and Edna Hong (Princeton 1991)

SV: *Samlede Værker* (3rd edition, Copenhagen 1962) volume 16.

JP: *Journals and Papers*, translated Howard and Edna Hong (Bloomington 1967-8)

Pap.: *Papier* (Copenhagen 1909-48)

(2) D. F. Strauss, *The Life of Jesus Critically Examined*, London 1898, p. 780 (日本初大訳「イエスの生涯」) 教文館一九九二、K. I. (原注)

(3) Murdoch, Rupert (1931-) トマス・ザ・ベラ・ヒューリー Fox Television, 20th Century Fox, New York Times, London Times 等を経て上記の News Corp の編集者であつて、今最も大きな影響力をもつ。一九九七年 United Jewish Appeal による Humanitarian of the Year など、一九九八年にはカトリック教会にてナッシュビル市長に選出された。ホーリー・リバート田嶋。(訳注)

(4) これは一九九八年一一月、英國キエルケゴール協会で読みあげられた原稿である。

新たな国際的研究の光を浴びるキエルケゴール

ヴァルター・R・ディーツ

藤枝 真 訳

ディーツ 新たな国際的研究の光を浴びるキエルケゴール

キエルケゴール研究は現在欧米の広い地域において熱心に行われており、キエルケゴールを狭い意味で流行の哲学者として捉えることなく研究が進められている。キエルケゴール研究センターは一九九三・九四年のデンマーク政府の寛大なる資金援助を得て設立され、コペンハーゲン大学神学部組織神学研究所と提携した。一九九六年から定期的に研究年報とモノグラフが刊行されている。以下では、一九九六年及び九七年の『キエルケゴール研究年報 *Kierkegaard Studies Yearbook*』について紹介し、また一九九六年のシンポジウムの論集『キエルケゴール再訪 *Kierkegaard Revisited*』と、ドロテア・グレックナーの著作『キエルケゴールの反復の概念 *Kierkegaards Begriff der Wiederholung*』について論じる。初年度は、テーマの重点は人間学、倫理学、そして解釈学の領域に置かれて報告がなされた。一九九六年の研究年報の序言において、二つの基本方針が示されている。一、キエルケゴールに対して学際的な取り組みをするとともに、二、歴史的・批判的キエルケゴール全集という主要プロジェクトに伴う文献学的なキエルケゴール研究。この全集は通常の印刷された版と、電子テキスト版(CD-ROM)として刊行される。研究年報には、毎年八月に行われるシンポジウムにおける講演の出版や、協同研究者の研究計画の構想、史的・批判的全集の具体化に寄せた論文、研究センターからのニュースなどが含まれている。ニュースには、例えば、研究センターに属する研究者の簡単な研究実績のリストなどが含まれている。その点でこの研究年報は、キエルケゴール研

究の論文を刊行する単なる機関誌ではなく、研究センターと関係する研究論文を収集し編集する性格のものである。

『キエルケゴール研究年報』第一号（一九九六）

一九九六年の年報では、問題の重点は「死にいたる病」に置かれている。序論において編集者であるドイザーとカペラーンが、「キエルケゴール研究の展望 Perspectives in Kierkegaard Research」(1-14)を述べている。この展望は実に基礎づけ的な性質を持つていて、すなわち、キエルケゴールの著作は、解釈の必要があるものとしてどの程度まで明らかになるか、そして、どのようにしてこの解釈は神学的なハンディと、著者の自己理解に追いつかねばならないのか、といふことである。単に伝記的な解釈は、キエルケゴールの人柄をまったく薄めてしまうものであると同時に的はずれである(5ff.)。続いてA・ハネイとA・グレーンの論文が収められている。彼らは新しい議論の状況を引き合いに出して論じる。その状況とはミヒヤエル・トイニッセンの二本の論文（一九八一、一九九一・九三年）によって形成されたものである。反抗の絶望は、どの程度までそれぞれの絶望にとって根本的であるのか、弱さの絶望は反抗の絶望に由来するのか、という疑問をハネイは究明する。その際、弱さの絶望が視野に入ってくる。すなわち、我々は、むしろ他の人間になりたいがために、自己自身を拒絶しなければならないか、ということであり、そしてまた逆に、我々は他の人間になりたいと願うことなしには、自らを拒絶し得ないのか、神がいなくとも正当な自己存在とうのがあるのか、もしくは、キエルケゴールが考えるとおり、それは常に絶望となるのか、という

ことである。ハネイの問いは以下の所から発せられる。つまり、三つの絶望の根本形式というキエルケゴールのテーゼ（「一つではない—絶対的に自己自身になろうとしたこと」）は十分根拠のあるものであるかどうか、つまり、非本来的な無意識の絶望のようなことがあるかどうか、といふことである（15）。この批判に対する問いは以下のようなることである。つまり、あらゆる絶望は結局は絶対的に自己自身になろうとする願望である、といふキエルケゴールのテーゼは、無意識の絶望を排除しないかどうか、といふことである。

絶望の概念について、アーネ・グレーンはキエルケゴールの絶望の現象学を究明する。」の論文では、ハネイがしていると同様にトイニッセンを引き合いに出している。」の論文ではトイニッセンの「修正 Korrekturen」に関する、細分化されてはいるがあまり根本的ではない議論が問題になつてゐる。グレーンはトイニッセンを以下の点で認める。第一に、「死に至る病」における反抗概念の多義性と異質性（43）、そして第一に、キエルケゴールは人間学的根本規定（AのA）を「絶望の分析を通じて与えられたのである」というテーゼ（47、「方法的否定的発想 methodischer Negativismus」）である。」のグレーンの答認は実に重大なものであるが、内容からみて、必然性が伴つてはならないと思われる。それでもグレーンはかなりの程度まで説得力のある反駁に成功している。喪失（Verlust）に直面したときの絶望と悲しみの区別によつて（「愛の業」参照）、喪失の経験は肯定的に評価される。つまり絶望としてではなく、悲しみとしてである（56ff.）。同様に、「愛の業」に関連づけることと、キエルケゴールの「第一」の倫理は、空疎なものではある（60）から、トイニッセンとともにそれぞれの個の抽象的な「遂行 Exekution」をその倫理にならういけるのは全くばかげた」というふう、といふことをグレーンは示す。トイニッセンの批判の要点は、キエルケゴールが外的なも

のであると暴露した絶望の形式を、トイニッセンが誤つて本質的かつ基礎的な形式として定めたところに存する。「修正」の概念はそれ故に、キエルケゴールが「死に至る病」で到達した論証の特徴に対して、かなりの後退を意味しているのである。

グレーンとハネイに対するトイニッセンの非常に詳しい回答が続けて掲載されている。「より理性的なキエルケゴールのために Für einen rationaleren Kierkegaard. Zu Einwänden von Arne Grøn und Alastair Hannay」(61-90) と云う風変わりなタイトルである。この論文は特に「反抗 Trotz」の概念の多義性へと再度立ち帰るものであり、「無意識の絶望」の概念についてのトイニッセンの批判を明瞭なものにしている。この重箱の隅をいつくよくな、しかし決して妥当とはいえない批判は、キエルケゴールの論証の核心、そしてその現象学全体を視野に入れているのである。更にトイニッセンは次のことを問題としている。すなわち、絶望を可能な限り外部に位置づけ、またそれを受動的現象として特徴づけることである(70)。それによつてキエルケゴールの弁証法の更なる本質的な要點が切り離される。その要點はキエルケゴールの現象学の進展を特徴づけるものである。つまり、自己への関係を見る」とにおいて、人間の自己を自発的なものと理解すること、これが「死に至る病」の要点である。それに対して、自己を単に外在的な力の生け贋だと慰み物として解する」とは、極めて重要な絶望の典型的な現われと思われる。トイニッセンは、現象学の道筋を逆にたどり、そうして絶望の根底の外在化の素朴さを正しい状態にしようとすることで、そのように絶望した人をいわば回復させようと試みる。このような論証の逆行を通じて、トイニッセンは、「あらゆる絶望の中に反抗がある」というキエルケゴールの試みは、失敗として非難される」(71)といふことを確証するのである。トイニッセンが言つようには、苦しみにおける弱さが自己

関係における反抗の契機を実際に取り除くかどうかについては疑問が残る。トイニッセンが絶望の現象学の明晰に考え抜かれたイメージを抱いていたことは明らかである。キエルケゴールの理論よりも高い妥当性がそのイメージに実際に伴っているかどうかは疑わしい。グレーンの異議を見て、トイニッセンは「キエルケゴールは絶望としての喪失の体験を軽視する」(77) という所に留まるが、これは適切ではない。というのも、ここでは自己経験における喪失の確定だけが絶望を構成するからである。トイニッセンはキエルケゴールの誤解された「道徳主義」に抵抗する。この道徳主義は、倫理的な絶望の禁止という恐ろしい力の内で頂点に達するものである(78)。いや、「死に至る病」においてそのような道徳主義がそもそも存するのかどうかが問われなければならない。もし「この誤解された「絶望の道徳化」をトイニッセンになすりつけるなら、さらに次のことが問われねばならない。すなわち、何故ここに「恐ろしさ Grausamkeit」があるか、ということである。なぜなら、そのように誤解された絶望しないことへのアピールは、信仰や救済が存在しないときのみ恐ろしいものとなるであろうからである。絶望の普遍性が「神の前で」罪の普遍性として示される」とは、決して恐ろしさの表現であるはずがない。キリスト教の思想家にとって、あらゆる者は神の前では罪人であるということは、恐ろしいものではほとんどない。それに対して、繊細な哲学的嗅覚をもつて、絶望のより貴重で必然的に正当な形式を探し出そうとすることには疑問が残るようと思われる。絶望の特定の形式を、罪としての潜在的な規定から自由にしておくという無理な要求は、キエルケゴールの考え方では、反抗の表現である。

ハネイとの論争の中で、トイニッセンはキエルケゴールの「眞の血」の概念をうち碎こうと試みる(85ff.)。「血」生成のあらゆる努力は既に「神が基底にある血」の否定を表している、と

いうような印象は回避されなければならない」とトイニッセンは書く。トイニッセンの批判はしかしながら「自己」の「救い」のみを田指すのではなく、絶望の救いもまた田指すのである。つまりそれは無能力もしくは必然性の表現なのである。キエルケゴールが、表向きの無能力を密かな無願望として暴き出すことに尽力している一方で、トイニッセンは逆の道を行つてゐる。「絶望は、無願望よりもむしろ無能力に基づいてゐる」(89)。トイニッセンにおいて、外的に必然的なものとの観点に固執する際に、繊細で扱いにくく弁証法は無視される。そして絶望の核心は誤って位置づけられてしまつ。つまりその核心は、キエルケゴールによれば、他のものになることが出来るところにあるのではなく、神によって指定された「自己」にならうとしたところに存するのである。トイニッセンの批判に田を向ければ、それがあるいは其において当てはまるかどうかは少し重要ではなく、キエルケゴールの論証のレベルと鋭さの裏をかくしていう意図によって、どの程度まで特色づけられるかが重要なのである。その際、論文のタイトルにあるような「より合理的な rationaler」キエルケゴールが出現するかどうかは依然疑わしい。

N . . . カペラーンの論文「始めて俗物の絶望あつた Am Anfang steht die Verzweiflung des Spießbürgers. Zu Arne Grøns *Kierkegaards Phänomenologie?*」(129-149) も「死に至る病」の第一部の構造分析を提示し、また俗物的な絶望の現象学を展開すべく。カペラーンのトーティゼは、俗物といふのは直接性の無意識的な絶望と弱さの絶望との間に、「過渡的人物像」として解釈されうる(147) である。A・ハネイの論文「パラダイム的絶望とキルケゴールの人間学の探求 Paradigmatic Despair and the Quest for a Kierkegaardian Anthropology」(149-163) やは、トイニッセンの論争が再び展開される。キリスト教の前提に染められてこなした哲学的人間学のために、神学

的に基礎づけられたキエルケゴールの人間学を批判的に破壊する」といふが、ハネイはトイニッセンの背景にあつたハイデガーの現存在の存在論に基づいてゐるところ。ハネイはその際に、トイニッセンから激しく反論された「眞の自由」の概念を守る。「これは、眞なるものとして、「永遠に有効なもの」(162)として認識できる「所定かつ限定された自由」から区別されるものではない。ハネイの論文の真髓は次のところにある。すなわち、キエルケゴールにおいて宗教的なまゝの、「関心事Anliegen」でもなければ、テーマでもなく、部分領域でもない。それはあらゆるものを決定する前提条件なのである。(163)。

ハイコ・シュルツは、「信じるとは存在する」とである To Believe is to Be. Reflections on Kierkegaard's Phenomenology of (Un-)Freedom in *The Sickness unto Death* (164-185) へ題された論文で、現在ハイツにねじて最も集中的に論じられてゐる自由の理解を展開していく。(165)。自由の自由の存在論的回旋(一、自由は自由である)は、以下の三つの観点を通じて補足される。一、自由は可能性と必然性の弁証法に存するものである。二、単なる自由意志は作り事である。四、善なるものは自由である(積極的自由)。キエルケゴールは観念論的な自由の概念を主張するのではなく、不安と絶望でもって、自分自身に据えられた自由の形式を視野に入れている。【死に至る病】によれば、自由の最高の形式は、「自分自身の絶望を、罪と呼ぶようなまことにその能力と同一のものであろう」(179)つまり、罪の意識と同一なのである。その罪の意識とは、神によって指定された自由の前に絶望しながらも、もはや逃げることをしないのである。「自由」が非自由であるのはまさに自由自身を非自由なものとして認めることができないからである。(181)。キエルケゴールによれば、非自由は、錯覚に満ちた觀念性を追い求めるために、自由自身に不透明(undurchsichtig)

に留まる意志のうちに存するのである。絶望とは、意志の葛藤(181)が内在的には克服され得ないところ」とを意味している。ただ自由中心的な願望において正氣でいるところ、止揚不可能な弁証法における意志は、それ故にキエルケゴールにとっては意志の隸属である。逆にこうと、信仰は「意志の行為」ではあり得ないのである(182)。リストだけが意志の自由の実現として、神の永遠の解決へと完全に従属することにおいて、信仰を現実化したのである。従つて自由は非自由を薄めたり否定したりすることのうちに現実化されるのではなく、信仰が予見するといふの終末論的立場の意識の中で非自由が認識されるとこうといふにあるのである。自由であるところには、「したい」とをすると「が出来る」ということでもなければ、なりたるものになる「と」とが出来る「ところ」でもなく、そうではなく、およそ自由である「と」とは信じぬことなのである(185)。

ヨアキム・ガルフは論文「ヨハン・ネス・デ・シレンチオ—沈黙の雄弁家 Johannes de silentio: Rhetorician of Silence」(186-210)でキエルケゴールの「おそれとおののき」に取り組んでいる。これはまた伝記的同一性と文学的同一性の関係が言及されてくる。キエルケゴールの著作は「ある種の教養小説を構成している…そこにおいては、書くところ」とは筆者に対し産婆術の如き関係をとる」(207)。せしあたいで使用された仮名もまだ、結局はキエルケゴール自身の著作活動に取り入れられてしまへるとからキエルケゴールを守ることは出来なかつた。生が作品を決定するのではなく、作品が生を変え、作り替えるのである。たとえそれが完全な一致を見なすことでもある(209)。であるから教会への攻撃は、最後には自分自身の歴史を書く(規定する)ようだ、著作活動の必要な表現であつたのである。エベルハルト・ハルブマイラーは、「余話術としての建徳的なもの Das Erbauliche als Kunst des Gesprächs. Reflexionen über die homiletischen

Perspektiven in Kierkegaards erbaulichen Reden] (293-313) や扱う。その際、建徳的なものの概念は三重に指定される (295-299)。一、文学的範疇として (即ち、宗教的文学の類)、二、宗教・伝記的範疇として (実存の語取隨くと隨伴する)、三、神学・哲学的範疇として (それによつて建徳的なものは、反思弁的に実存を開明するものとして働く)。ハルプスマイヤーは現代の説教法に照らして、キエルケゴールの説教の理論を、そして、法と福音についてのルターの問題をも視野に入れ分析する。「根源的中断—コペンハーゲンの聖母教会や金曜日の聖餐式におけるキエルケゴー
ル—*Die ursprüngliche Unterbrechung. Søren Kierkegaard beim Abendmahl im Freitagsgottesdienst der Kopenhagener Frauenkirche*」(315-388)へ題されたカペハーゲンの語文は、キエルケゴール家の教会へ行く習慣について史的に詳細に明らかにする。

続いて、新しいキエルケゴール著作全集に関する文献学・テキストクリティーケの語文がある。新版全集に基づいて適切な翻訳を軌道に乗せることが、我々の長期的な目標となるはずである。ユ
イツではこのような切実な要求が特に急を要するものになつてゐる。それどころの完全な Papier
がこれまでなかつたからである。エマヌエル・ヒルシュによる全集は、時代を考慮に入れねば
本当に称赞に値するものであるが、しかしながら配列や注解、翻訳の点では、全面的な改訂を必要
とする。既に知られてゐるよつて、ヒルシュの翻訳はさへつかの誤訳が見受けられる。それゆえ
に、新しいデンマーク語全集に基づいて、もう一度完全に新しいドイツ語版を作ろうという計画は
非常に歓迎されるべきである。確かに、キエルケゴール研究者は各自がデンマーク語全集を精読
することが望まれてゐる。しかし学ぶ上で日常的使用のためには、国際的な学問の標準にふさ
わしいような信頼するに足る翻訳がなければならない。一巻から一四巻に關して言えども、新版全

集は出版の時系列に沿った順序を選んでいる。テキスト執筆のクロノロジーは正しく進んでいるとは言えず、再構成するのは困難である。クロノロジー以外にも、作品配列のために類型だとか内的関連性の問題が考慮されてくるのだ（533f.）たとえば第五巻には一八四三～四五年の建徳的講話がまとまつて出版されるのである。幸運にもクロノロジーの判断材料もまたそれほど固定して使われてはいないので、全部併せて、意義があつて納得がいく配列が出来るのであると考えられる。公刊された著作は、四つの時系列のグループに分けられる。一、一八三四～四一年の初期作品、二、「本当の」仮名の著作一八四三～四六年（例えば、「あれかこれか」「不安の概念」「愛の業」「非学問的あとがき」）、三、「偽の」仮名の著作第一期一八四六～五一年（「死に至る病」「キリスト教の修練」「血の意味のたるに」等）、四、教会批判一八五四～五五年。最後の区分には、「瞬間」のパンフレット第一〇冊を含める。

【キエルケゴール研究年報】第一号（一九九七）

キエルケゴール研究年報の第一号では「死に至る病」が再度重点的に扱われるのであるが、この号では特に「死に至る病」第一部を、第一部との関係において考察している。C・スティアブン・エヴァンスは「死に至る病」における「他者」の意味を追求する。「死に至る病」における他者とは誰か——自己の構造における神と人間の関係 Who is the Other in Sickness unto Death? God and Human Relations in the Constitution of the Self (1-15) である。エヴァンスはキエルケゴールの自己」概念を哲学史に沿って押め出す。時間の中や個別的には関係するところの定義をしつつもキエルケゴー

ルは自己」を「存在論的な語で」表す(6)。まさに神との止揚不可能な関係の中では、キエルケゴー
ルによって構想された自己は完全に「実体的な自己」である(7)。ゆえに、自己は孤立して神に関
係しているのではなく、同様に「他の人間」に關係しているにも拘わらず、神は「真正の自己性の
基礎」(11)なのである。ハリでキエルケゴーは「人間の自己」は他者からは孤立している、とい
う主張をしているわけでは全くない」のである(ebd.)。例えばアーバーは「これに対する、「個人主
義者の原型」としてキエルケゴーを誤解してゐる(7f)。キエルケゴーによつて「神の前に立つ
こと」が特に重要であつたにもかかわらず、如何にキエルケゴーが独我論的な個人主義を殆ど支
持するつもりがなかつたか、ということをエヴァンスは明らかにしてゐる(12)。このカタゴリーは
実のところ、ポストモダンの個人主義——そこでは人間は最高権威者との結びつきを喪失する」と
において進歩するのであるが——に対する防護である(15)。キエルケゴーの自己概念は個人主義
を阻止する。ところも、その自己概念は超越的な力に基づいてゐるからである。A・グレーンの
論文では、「死に至る病」における第一部と第二部の関係 *The Relation Between Part One and Part
Two of the Sickness unto Death* (35-50) が問題になる。グレーンはその際、二つの主要部分の内的
関係を探る。そこでグレーンは第二部が「死に至る病」の全体にとって重要なものであると見る。
第一部の特殊性は、第一部の純粹な「人間の自己」とは反対に、「神の前」にある自己の概念では
なく、罪の概念である。キエルケゴーによつてはその復權、刷新、深化が重要なのである。次
のA・ハネイの論文は「キエルケゴーの絶望と怒りの心 Kierkegaardian Despair and the Irascible
Soul」(51-69) を扱う。ハリでは先やキエルケゴーの「絶望 Verzweiflung」トマス・アクィナ
スの「絶望 desperatio」の親近性を分析するハリが問題になる。トマスにおいて主知主義的な真理

の了解が問題になり、一方キエルケゴールにおいては真理への個別的な関わりが重要であるにも関わらず、両者は、自然的欲求の屈折を自己実現の条件 (conditio) として見なした。しかしキエルケゴールの要点は認識と意志の弁証法であるから、キエルケゴールによれば、真理のいかなる先入見のない認識願望といふものなどないと、「ハ」にならう。だから、キエルケゴールにおいて、究極的には、罪の本質は、真理を「理解するつもりはない Nichtverstehenwollen」、「ハ」にいるに存する。「理解やめなよ Nichtverstehenkönnen」とか「まだ理解してこない Nochnichtverstandenhaben」というところにあるのではない。読後には次のような疑念が残る。つまり、トマベとキエルケゴールが、真理は自己の実現でありそして絶望は罪を表す、と主張するとき、両者は同一の「ハ」を念頭に置いていないのではないかという疑念である。にもかかわらず、これはハネイによつて緻密に為された意義のある比較研究である。

G・パティソンの論文「統制的概念」としての『神の前にある「ハ』』(Before God) as a Regulative Concept (70-84) は読者に大変な困難を強いる。ところのモダンは、ある明確なモダン (ペストモダン) の神学概念に根ざした、キエルケゴールの思想を非難するような先入見に基づく論理に注目するからである。「キリスト教は agnosis、つまり無知として自らを再構築しなくてはならぬ」(71注) というのがパティソンの前提である。キエルケゴールの神学の基本概念は、存在論的にではなく、また神学的にでもなく、適切に解釈されている。であるから「神の前に」実存するという概念は、神の実在 (もしくは不在) という主張とは関係なく存する (72)。パティソンの大胆な議論は、カントやシュライエルマッハー、サルトルにまでも及ぶ。それらの議論は明らかに、「主体性は真理である」(前々からひどい誤解をされやすい一文である) というクライマックスのテーマを

（四）括弧に解釈する「」を通りて動機づけられたものである。F. A. ベッバーの論文「死の論理詞 Prepositions of Death:Kierkegaard's *The Sickness unto Death* Read with Duras' *La Maladie de la mort*」(85-99) も、マルクリッヒ・トーハイムの『死の病』(1982) へお出でで読まれる。ソリやセカールケールヒトコラスの死についての理解の比較分析が為される。

一・コハグレーベンの論文「死に至る病」の構造論理について *Zur Aufbaulogik der Krankheit zum Tode* ド、彼はクノーハルベネイの論文に回謂し、「死に至る病」を進展する「精神の癆症生物学」(109) として解釈してゐる。また絶望を「概念の論述 Begeifffsentwicklung」として理解してゐる(「死に至る病」の副題—論述 *Udvikling*’ 100f)。ソのりいは、第一部から第一部への移行についても、キエルケコールが「罪の主題でもつて内容的に何らの新しさも持ち込むのではなく」、第一部はただ単に、第一部の神学的に有効な絶望の説明として解釈されるべきである、とする立場なのである。第一部が暗に罪の問題を扱つてゐるので、キエルケコールは「罪の教義的な概念のための解釈学的鍵」について論じる(114)。従つて、「絶望」は「罪の前宗教的な形式の典型的なもの」であり、また「罪」は「普通の人間的な「死に至る病」の神学的な解釈」である(112)。問題は、なぜ「死に至る病」が第一部で終わらなかつたかと云うところではなく、どうして独立的な第一部がそもそも存在するのか、という更に興味深いところに行き着くだらう。ソのように先鋭化された疑問の背後には、罪について現象は信仰を通じてではなく、暗黙の内に神の前にあることを通じて構成されるところと云ふ、神学以外の言葉遣いで語ると云ふ考え方の具体化が在る。そこに「死に至る病」第一部の要点があると考えられる。

続く論文は「」では簡単に紹介するに留める。ダリオ・カンザレスの論文「〈行為〉と〈機会〉

『Act』 and 『Occasion』: On the Ontological Structure of *Coming into Existence* (1847-209) では、ない
 誰的構造について、あるいは時間の生成について語られる。また、ヤルヘトムは「愛と連続性 Love
 and Continuity: The Significance of Intersubjectivity in the Second Part of *Either/Or*」として論文や問
 題的意義を語る (210-227)。ヤヌヘトムは概念論のテーマ (トーベー、ニカイナス、スム
 ク) に批判的に取り組む。ニカイナス・ニイギーの論文は「人間の実存関係のキエルケゴール
 の現象学 Kierkegaards Phänomenologie der humanen Existenzverhältnisse」である。ニイギーは、觀
 念論的現象学の地平においてキエルケゴールを解釈する試みを批判する。ニイギーの基礎づけ的な
 意義についての説明は、マイリッセンとグレーンらが主張しているよへな、「否定性」をキエルケ
 ゴール哲学の解釈の鍵となる無理な要求 (273-276, 279) に対するものである。キエルケ
 ゴール自身は否定性の概念の優位性に対して (トーベーに対し) 強硬に抵抗した。またキエルケ
 ゴールにおいて「現象学」がどういう意味で語られるべきかが明らかにされる必要がある。トーベー
 は、トーベー、フッサール、ペースとトーベーイギーの分類 (273) が重要である。

文献学的分野では、全集の編集方法が再度問題になつてゐる (282-370)。トーベーでは特に、J.
 ハンセルップとJ. クヌッズソンによる、新キエルケゴール全集のトキストクリティックの方針
 (336-370) が重要である。トーベーは問題になる編集の方針は、補助資料の形態やグラフィックデザイン
 などである。これまでの全集の編集者が附けた注記は今回採用されていない。新全集はオリジナ
 ルに忠実なことを田指してゐる。例えば、シリオドの後的小文字をそのままにするとか、といへば
 いろいろ頑固なところがあるキエルケゴールの句読点の打ち方などを視野に入れながらの作業である。

統いて、デンマーク語、英語、ドイツ語、フランス語の著作名の略記法が記される。例えば「死に至る病」は、順にSD、SD、KT、MMで表される。ノルマに示された略記号は重要な意味を持つものであり、国際的に統一のためとされるべきであろう。

『キエルケゴール再訪』（モノグラフ・シリーズ第一巻、一九九七）

以下で論じる『キエルケゴール再訪 Kierkegaard Revisited』は、研究年報に対してもくらか質が落ちているが、この論集は先の一冊とは違ひ意味において成功を取めていると考えられる。論文を絞り込み副論文や対話を除く」として、限られた形ではあるが一九九六年五月に行われたシンポジウムの議論を垣間見ることが出来る。この論集には「キエルケゴールと意味する」との意味 *Kierkegaard and the Meaning of Meaning It* という不思議なタイトルの下に学会大会の発表が収められてる。ハワード・V・ホングは、人間の自由と神の全能との関係という、アポリアに陥つてゐるような問題に導かれて、キエルケゴールの思想にとって「人間の自由を強調する」とは決定的ないとある、というテーゼを論じてゐる(9)。ハイツロマン主義に精通してゐるエルンスト・ベーラーは、キエルケゴールの「イロニーの概念」のロマン主義への関連性を論じてゐる(13-33)。ハイツロマン主義への関連についてはK.-P.-モーテンセンが442-459で論じてゐる。ミンヤエル・トイニッセンは「キエルケゴールにおける人間学と神学 Anthropologie und Theologie bei SK」(177-190)を論じる。これは、キエルケゴールにおいて、我々はただ苦労しながらも「血肉的な神学」を見つけることができる、また我々が——キエルケゴールとは異なり——人間を「そのもの」として非神学

的に考へる限りにおいて、人間が「指定された存在 *Gesetzsein*」である」とは明らかである、といふテーゼと結びついてゐる（182）。トマニッセンにおいて、キエルケゴールは全く逆さまにされてゐるのであって、続く討論の白熱した様子（未収録）から、高次元の論争を活氣づける術トイニッセンがいかに身につけてゐるかと云ふことを見て取ることができる。」の討論はまた、神及び永遠性と血〔J〕との関係が、絶望を通して、謂わば否定を通じて確認されることが出来るかどうか、といふ問い合わせにも触れている。「第一部において絶望は罪であると云へ」と、キエルケゴールは血〔J〕が神の前に立つものであると明らかにした」（181）。そうしてキエルケゴールの論証の傾向はひらく返されるだけではなく、第一部の相対的な独立性と、暗に含まれたテーゼと共に、「死に往る病」の一部構成もまた撤回せられる」とになる。「愛の業」における相互性・*Gegenseitigkeit* in *Der Liebe Tun?*」（223-237）へ題された論文でグレーンはキエルケゴールの解決手段を復元し考究する」とを問題としている。」のことは、キエルケゴールの愛の概念を見る」とで、愛の概念に含意されている承認と相互性がキエルケゴールによって検討されると云ふことを通じて為されるのである。次に、哲学者キエルケゴールについての論文の中でハネイは、キエルケゴールは真理についての倫理的了解をしたところテーゼを明らかにする（251）。興味深いのは、ヴィートゲンシュタイヒとマッキンタイアとの繋がりであり、なによりもキエルケゴールをポストモダン的に受け取ることに対する厳密な制限である（248ff.）。ブルース・H・カーメズの論文は、特に国家と教会の分離を入れつつ、キエルケゴールのデンマーク及びヨーロッパの社会史におけるキエルケゴールの位置づけをする。Kl・M・コダイユは、キエルケゴールの許しの精神と、近代の哲学や文学の許しの概念との奇妙な結びつきを描いてゐる（387-409）。」の他に、フランス語圏やロシア、

スラヴ、スカンディナヴィア地域における新しいキエルケゴール受容史・研究史に関する興味深い論文が掲載されている。トマス・ペッパーは、「反復」についての論文(460-480)において、コンスタンティンと青年との同性愛的な関係を扱っている。クラウス・ヴァルフの「同時代性」の神学としてのキエルケゴールの啓示神学」(481-501)は、冷静であり事実に基づいていた印象を与えていた。カトリック教徒であるヴァルフは、キエルケゴール全著作の鍵概念としての啓示を把握しようと試みる。つまり、キエルケゴールは審美的な著作家ではなく、宗教的な著作家である、ということである。特定の宗派間の相違点が滑稽なほどに誇張された仕方で示されているが、それでも、キエルケゴールが「啓示の伝達」というひとつの戦略の上に置かれている、というヴァルフのテーマは妥当であるように思われる(484)。

以上、本書に収録された論文のほんの一部分を紹介したことになるが、その多くは詳細な検討をする価値があるだろう。全体に関して一言付け加えるならば、本書は残念なことに結局は幾分物足りないものになってしまった、と言える。シンポジウム参加者、特に発表者と司会者について、読者には何の情報も与えられていないからである。読者は他の巻の「寄稿者一覧」でもって何とか間に合わせざるを得ないのが現状である。この巻には実に多くの興味深いものが納められているが、一九九六、九七年の年報とは対照的に、留保付きで推奨に値するものである。

D・グレックナー『キエルケゴールの反復の概念』（モノグラフ・シリーズ第三卷、一九九八）

新キエルケゴール研究創刊号

モノグラフ・シリーズの第三卷は非常に成功しているように思われる。キエルケゴールの自由の理解に関するドロテア・グレックナーの「キエルケゴールの反復の概念」*Kierkegaards Begriff der Wiederholung* である。この論文は間違いなく新しい視点を切り開き、議論に価値ある衝撃を与えるものである。以下に記す二つの主な欠陥はグレックナー自身が認識していることである。一つは、キエルケゴールの神学史・哲学的的前提を詳しく分析することを彼女は放棄していること（3、注2）であり、もう一つ私が考えるところでは、キエルケゴールの一八四六年までの著作だけを扱うという限定を彼女が行っていることである。更に三番目の欠陥として、索引を付けていないことなどが挙げられるだろう。これらの欠陥のうち、この秀逸かつ感情が込められた研究の価値を事実上限られたものにしてしまったのは一番目の欠陥であろう。

グレックナーの意図は、キエルケゴールの自由の理解のための更に進んだ見方を提示することにある。この新しい見方によれば、従来の非常に広範におよぶキエルケゴール研究は不十分とされている。彼女にとって、問題はこれまでの諸解釈を「正す」ことではなく、キエルケゴールの自由理解のために、正真正銘の先進的見地を示すことにある。そしてグレックナーの著書は実際に「キエルケゴールの自由理解への独自のアプローチ」に成功した、ということを我々は認めなければならない。加えて、グレックナーはキエルケゴールの反復の意味を分析する。これは、キリスト教の贖罪の概念およびプラトンの想起説を視野に入れたヘーゲルの媒介の概念と対を為すものである。

そしてそれは思弁的に把握されではなくなふと述べる。反復は「自由の最高の関心である」(Pap. IV B 111, 264, 12 頁以下参照)といふキエルケゴール独自のテーマをグレックナーが中心に据える際、彼女にとて自由の経験の現象学は、実現された自由の問題よりも重要ではないといったことが明らかになる。」の意味で、「自由それ自体が反復なのである」(Pap. IB111, 282)。そして反復は「幸福な愛」なのである(115)。実現された自由を主題として扱うときに、愛の概念は実際のところ非常に重要である(144ff., 155ff., 257ff.)。加えて一八四七年にキルケコール自身が決定的に表明している。だから、グレックナーが初期作品だけに限定したことは、賢明なことではない。自己実現(Selbstverwirklichung)もしくは反復はその際に「人間を先立つて規定する神関係の現実化」として理解される(19)。全能(Allmacht)と愛の関係についてのグレックナーの論述は成功しているように思われる(156-162)。無論いとも、「信仰」は残念なことに初期作品の中から解釈されたものであり、例えば「死に至る病」のような成熟した著作から解釈されたものではない。グレックナーが最後に全体のまとめをすることなく、また分析した結果の神学的・哲学的意義を包括的に展望することを欠いていたことが、幾分残念ではある。

自由はその実現からのみ理解されるべきであり、自由は反復として理解されるべきであり、また他方で自由は信仰の表れとして理解されるべきである、というグレックナーのテーマは、ドイツにおいて九十年間に渡ってキエルケゴールの著作に対してなされてきた自由理解についての分析に、プロテスタント的な感覚(信仰—義認論—キリストの逆説)を持って、意識的にひとつの神学的な傾向を与えたのである。「今日我々はキエルケゴールをどう扱うことが出来るのだろうか」という問いは、「今日我々はキリスト教の信仰をどう扱うことが出来るのだろうか」という問いに答える

ことと最早不可分ではないだろう。グレックナーの解釈は確かに神学的であるが、全く押しつけがましいところではなく、哲学的なキエルケゴール主義家（例えばコダイユ、トイニッセン、J・L・ブランス、H・シュルツ）との高水準の対話を続けているのである。

アプローチの多様性、真の意味での国際的な研究グループの形成、高度な学術的要求は、キエルケゴール研究センターの研究年報及びモノグラフシリーズが、学術的に真摯なキエルケゴール研究がなされるようなしなつかりした場であることを保証するものであると言える。

注

(一) 訳者注 本文中丸括弧内の数字は該当巻の頁を表す。

本論文の翻訳と紙幅の都合による短縮について、Dietz 教授の快諾を頂いたことを記し、
訳者より感謝の念を表します。

キエルケゴール協会会則

キエルケゴール協会会則

- 一、名称 本会はキエルケゴール協会と称する。
 - 二、沿革 本会は一九三七年に京都で創設され、一九五七年以降大阪で発展し、一〇〇〇年に京都で新たな活動を開始した。
 - 三、目的 本会は、デンマークおよび世界各国のキエルケゴール協会と密接に連繋しながら、キエルケゴー
ルの思想の理解を深め、広く社会に普及することを目的とする。
 - 四、事業 本会は、前項の目的を実現するために次の事業を行なう。
 - 研究会、講演会の開催。機関誌「新キエルケゴール研究」の発行。キエルケゴールの著作の邦訳及び
外国研究書の訳出。キエルケゴール研究に関する外国の事業の紹介。その他キエルケゴール研究に關
する必要な事業。
 - 五、会員 本会会員はキエルケゴールに関心を有する者とし、入会は理事会の承認をえるものとする。
 - 六、役員 本会は次の役員をおき、役員は本会の運営を行なう。
 - 会長一名。副会長一名。理事若干名。庶務理事及び幹事各一名。監査二名。
 - 七、理事 理事は総会において選出され、理事会を組織し、会の全般的な運営に当たる。任期は二年とする。
ただし再任を妨げない。
 - 八、会長 会長は理事会において互選され、本会を代表する。任期は一年とし、引き続いての再任は、二期
を限度とする。
 - 九、副会長 副会長は理事の中より会長の指名によつて委嘱され、会長に事故あるときは会長職務を代行
する。
 - 一〇、庶務理事及び幹事 庶務理事及び幹事は理事の中より会長の指名によつて委嘱され、会の実務上の運
営に当たる。
 - 一一、監査 監査は総会において理事以外の者から選出され、会計監査を行なう。
 - 一二、編集委員 編集委員は理事会によつて委嘱される。編集委員会規約は別に定める。
 - 一三、総会 本会は毎年五月に定期総会を開催し、事業報告及び会計報告・予算審議をし、理事の選出を行
なう。
- 理事会が必要と認める時は臨時総会を開催することができる。会則の変更及びその他重要事項につい
ては、理事会の審議を経て、定期総会又は臨時総会において決定する。